

研究ノート

東日本大震災を描いた絵本リスト

——東日本大震災の経験をどのようにして、そして、何を伝え残すのか——

村上 美奈子

立正大学社会福祉学部特任講師

The List of the Picture Books about the Tsunami and the Accident of Power Plant in Fukushima in 2011

——How Should We Tell and Teach the Experience of the Tsunami and the Disasters to Next Generation?——

Minako MURAKAMI

Assistant Professor, Faculty of Social welfare, Rissho University

要旨

2011年の東日本大震災の発生から2021年3月で10年になる。この10年間の間に、東日本大震災をテーマとする絵本は100冊以上も出版されている。これらの絵本は、学校での防災学習に、また、被災地を実際に訪れて震災について学ぶ際にもたいへん有意義である。本稿では、それらの絵本を、県別、市町村ごとに、そして、ジャンルごとにリストアップした。大災害の教訓を継承することは容易ではないが、絵本を手がかりとして継承を実現する可能性や、震災の絵本を通して防災について学ぶのみならず、生き方や人間のあり方についてそれぞれが考察を深めることが、このリストにある本を活用して可能である。

はじめに

2011年の東日本大震災から2020年度末で10年になる。現在の大学1～4年生は、震災時には小学校3～6年生だった場合が多く、関東地方で震災を体験していても、その時のことやそれに続いた様々なことを鮮明に記憶している人が多い。一方、現在小学生の子どもたちは、震災を経験していないか、あるいはその時に生まれてはいても震災を明確な記憶としてとどめていない。これまでの間、この震災についての多くの絵本が出版され、震災を子どもたちや次の世代への教訓として伝えようとする試みがなされている。

近年、日本国内でも地震や豪雨災害などが相次いでいるが、2011年の東日本大震災は特に規模が甚大で、また被災地も広範囲に及んだ。震災の経験を伝える絵本としては、2011年の震災以外にも、1995年の阪神淡路大震災の絵本としては、『ゆずちゃん』（肥田美代子・作／石倉欣二・絵、ポプラ社、1995年5月）、『あの日をわすれない はるかひまわり』（指田和子・作／鈴木びんこ・絵、PHP 研究所、2005年1月）があり、また、2016年の熊本地震の絵本としては、『2016年4月 熊本地震の現場から あのとそこいきみがいた』（やじますみ・作／絵、ポプラ社、2018年3月）がある。しかし、2011年の東日本大震災に関する絵本は、この10年間で、後載のリストにあるように100件以上が出版されていて、この経験を後の世代に伝えようとする強い思いと、それを絵本の形で表現しようとしてきた数多くの足跡が窺える。

この震災の教訓を、どのように伝えれば、もしくは、どのように教えれば、防災や減災、あるいはそこにとどまらない学びを子どもたちは獲得していく可能性があるのか、その際に絵本というメディアがどんな役割を果たしうるのか、この10年間で出版された震災関連の絵本をリストアップして今後の詳細な検討につなげていく足掛かりとすることが本稿の第1の目的である。

また、災害や戦争の痕跡を巡って学ぶ旅をダークツーリズムという言い方もあるが、中学や高校等の実地学習を通して東北の震災について学ぶ機会も今後ますます重要になってくる。その際、それぞれの地でのできごとを絵本を通して知ることを通して、イメージ豊かに学ぶ助けにもなる。そのため、このリストでは、絵本に描かれている地域ごとにリストアップした。震災の実地学習の前後の手引きにもなることが本稿の第2の目的である。

なお、東日本大震災の絵本をリストアップした先行研究としては、以下の3件がある。

- ・草谷桂子（2013）『3.11を心に刻むブックガイド』子どもの未来社、2013年11月
※絵本としては、72冊が紹介されているが、傷ついた子どもの心の助けとなる絵本や広島の実爆の絵本など、震災以外の事柄を描いた絵本も含まれている。
- ・針生隆・石岡芽夏（2015）「絵本に見られる喪についての臨床的一考察—3.11大震災関連の創作絵本において—」『東北生活文化大学紀要』第46号、pp.125-136
※東日本大震災に関する28冊の絵本の分析。
- ・前島康男『大学教育と「絵本の世界」 中巻（憲法・戦争・教育改革、3.11東日本大震災と子ども・教育、いじめ問題を考える）』創風社、2015年
※震災をテーマとする絵本については30冊紹介されていて、そのうち14冊については、絵本の本文がほぼ全体にわたって引用されている。また、いくつかについては、解説も書かれている。

なお、リストアップに当たっては、以下のジャンルごとに分類した。

〈全般または複数の被災地を描いたもの、あるいは具体的な地名が明らかにされていないもの〉

〈地域別（青森県）→（岩手県）→（宮城県）→（福島県）→（千葉県）〉

※岩手、宮城、福島については、県内の市町村ごとに北→南

〈自然環境の変化〉

〈被災した子どもを元気づける目的で作られた絵本、または、大人にも寄り添う絵本〉

〈震災の周辺；出版によって被災地を応援しようとする絵本〉

〈被災地での暮らしからの発信〉

〈防災絵本・減災絵本〉

〈学習絵本シリーズ〉

なお、震災の絵本については、各地の公立図書館に広く置かれているものは、このリストのうちのごく一部であり、国会図書館の分館である上野の国際子ども図書館にすら入っていない

ものも多い。このリストを作成するにあたっては、岩手県の大船渡市立図書館や、仙台市立荒浜小学校の震災遺構、宮城県立図書館、福島県立図書館で数多くの蔵書を閲覧したのをはじめ、沿岸各地のさまざまな震災遺構を回りながら一つ一つ書き加えていった。今後さらに市町村立の図書館も訪れると、このリストに挙がっていない震災の絵本に出会える可能性もある。

東日本大震災を描いた絵本リスト

※出版年の後ろに「E」とあるものは、英訳付きの絵本。

〈全般または複数の被災地を描いたもの、あるいは具体的な地名が明らかにされていないもの〉

・『地震の夜にできること』松本春野・文／絵、角川書店、2011年8月

※子どもが安心できるために、という願いで作られた絵本。巻末に、汐見稔幸による解説「子どもの不安にどう向き合うか」がある。

・『あのひのこと Remember March 11, 2011』葉祥明・文／絵、佼成出版社、2012年3月、E

・『おもかげ復元師の震災絵日記』笹原留似子・作、ポプラ社、2012年8月

・『かあさんのこもりうた』こんのひとみ・作／いもとようこ・絵、金の星社、2012年10月

※親の死が描かれている。動物を主人公として擬人化されている。

・『あしたの猫』遠藤綾乙・絵と文、オフィスエム、2012年10月

※遠藤は、1996年東京都生まれ。「15歳の私には、いま何ができるのだろうかと考え」、絵本を描いた。

・『僕らの海』小原風子・絵と文、阿喜印刷所、2012年11月

・『津波になった水龍神様（すいりゅうじんさま）と希望の光』わたなべまさお・文／いわぶちゆい・絵、日本地域社会研究所、2012年12月

※岩渕結は、福島県会津若松市生まれ。渡邊政男は、東京都生まれ。

・『東北未来絵本 あのときあれから それからそれから』みんなと荒井良二・作、山形新聞社、2012年12月

※蛇腹式の絵本。

・『月の貝』名木田恵子・作／こみね ゆら・絵、佼成出版社、2013年2月

※親の死やサバイバーズギルトが描かれている。

・『およぐひと』長谷川集平・作、解放出版社、2013年4月

※被災地を目の当たりにしてのことばにできない思いが絵本に表現されている。

・『日本丸の復興』飴屋善敏・著、星雲社、2013年4月

※2012年3月11日に「未来へ向けた鎮魂と絆のコンサート」において上演したミュージカル「日本丸の復興」を絵本にしたもの。著者は、岩手県千厩町^{せんまや}生まれ、宮城県塩釜高校卒。

・『あくしゅだ』あんどうえいさく・作、クレヨンハウス、2013年5月

※震災のできごとを描写して伝えるというのではなく、津波を象徴的に描いた作品。あんどうは彫刻家。アトリエに設置していた作品すべてを津波で失った。

- ・『ふたつの勇気～たくさんの命を救ったお医者さんの話～』山本省三・文／夏目尚吾・絵、学研教育出版、2013年8月
※石巻と福島
- ・『お～い、雲よ』長倉洋海、岩崎書店、2013年9月
※写真絵本
- ・『被災地からのつぶやき』和田恵秀・作、歴史春秋出版、2013年11月
- ・『優しいあかりにつつまれて』たかいちづ・たけさわさおり・文／ひらたゆうこ・ひらたひさこ・絵、くとうてん（神戸）制作協力、2014年1月17日
※神戸の震災で子を亡くした親と東日本大震災で子を亡くした親との連帯による絵本。
- ・『ほくの天国ポスト』寺井広樹・原案／志茂田景樹・作／福田岩緒・絵、絵本塾出版、2015年10月
- ・『きっと いいこと あるよ！ 東日本大震災と人々の歩み』戸塚英子・作、清風堂書店、2015年12月
※石巻市立大川小学校の生存者である只野哲也くんについての記述がある。
- ・『月のうさぎになったママ』千葉昌子・文／ふくもとしほ・絵、文芸社、2016年4月
※10か月の赤ちゃんの母であり、介護職員であった犠牲者をめぐる話。
- ・『つなみとゴンとコン』（帯木蓬生&小泉るみ子 民話シリーズ2）帯木蓬生（ははきぎほうせい）・作／小泉るみ子・絵、女子パウロ会、2016年5月
- ・『やまびこ』とうこ・さく／さいとう かこみ・え、文芸社、2018年4月
※震災で両親を亡くした兄妹とその祖母の物語

〈地域別（青森県八戸市）〉

- ・『津波の日の絆—地球深部探査船「ちきゅう」で過ごした子どもたち』小俣珠乃・文／田中利枝・絵、富山房、2019年3月5日

〈地域別（岩手県）〉

（二戸市）

- ・『空より高く Higher Than The Sky』（CD 絵本）新沢としひこ・作詞／中川ひろたか・作曲／クニ河内・編曲／石井麻木・写真、クレヨンハウス、2013年3月、手話詞付き
※1990年の歌が絵本化されたもの。卒園式や卒業式で歌われてきた。震災から9日目、岩手放送に保育園児が歌う「空より高く」が送られてきて、放送したところ、リクエストが殺到した。保育園ちゃいるどスクール（岩手県二戸市）の浪岡幸子園長が震災の直後に「あなたたちにできることは？」と問い、小さなひとたちは「歌がうたえる！」とこたえた。

（野田村）

- ・『はなちゃんのはやあるき はやあるき』（いのちのえほん24）宇部京子・作／菅野博子・絵、岩崎書店、2015年1月、岩手県野田村保育所

（宮古市）

- ・『おばあちゃんの紙しばい つなみ』 田畑ヨシ・作／山崎友子・監修、産経新聞出版、2011年7月、E、宮古市田老
- ・『ほくらの大きな夢の絵本：宮古市赤前の子どもたち』 僕らの夏休み Project、竹書房、2013年5月
 - ※ DVD 付き
- ・『「あの日」から走り続けて—東日本大震災と私たち—』 かけあしの会（岩手県宮古市）・著／あきやまみみこ・絵、同時代社、2014年
 - ※ 「いわて生協」の仲間により作られた絵本。

（大槌町）

- ・『かぜのでんわ』 いもとようこ・作／絵、金の星社、2014年2月
 - ※ 佐々木格（いたる）さんの自宅の庭「バルガーディア鯨山」の中の「風の電話」の物語。同じ電話を題材にした映画も2020年に公開された。
- ・『あの日～おおつち保育園 3・11～』 八木澤弓美子・語り／森谷明子・再話／絵、静岡うみねこの会・監修、牧羊社、2014年3月11日
 - ※ 八木澤はおおつち保育園の園長。子どもたちは震災で友達を亡くしていて、震災のことは思い出しちゃいけない、口に出しちゃいけない、と思いながら過ごしていたが、秋になり、あるきっかけから子どもたちが一斉に気持ちを吐き出し、共に一つの結論を見出す。

（釜石市）

- ・『つなみてんでんこ はしれ、上へ！』（ポプラ社の絵本17） 指田和・文／伊藤秀男・絵、ポプラ社、2013年2月
 - ※ 釜石市立鶴住居小学校、釜石市立釜石東中学校の子どもたちの避難の様子。釜石の鶴住居に建てられた「いのちをつなぐ未来館」には、絵本の原画やエピソードが展示されている。
- ・『あしたがすき～釜石「こすもす公園」きぼうの壁画ものがたり』 指田和・文／阿部恭子・絵、ポプラ社、2016年2月
- ・『おかあさんとゆびきり いのちのやくそく』 高垣知子・画／望海地区サービスゾーン協議会（兵庫県明石市）、2017年
 - ※ 鶴住居地区
- ・『ほんやきゅう』 指田和・文／長谷川義史・絵、ポプラ社、2018年7月

（大船渡市吉浜）

- ・『吉浜のつなみいし』 小松則也・文／絵、Peter Frumkin 英訳、青野美穂・英訳協力、吉浜教えの里プロジェクト・企画／制作、イー・ピックス、2015年1月、E
 - ※ 「みんなの震災学習テキスト」（吉浜教えの里プロジェクト、2015年8月）の前半部分にそのまま掲載されている。小松は、矢巾町立矢巾東小学校教諭、三陸町吉松出身。
- ・『もも色ゆうびんきょく』 小松則也・文と絵／ジュリアン・アーノット・英訳、イー・ピックス、2017年3月11日、E

※平成28年度ふるさとのおおふなとお話大賞“奨励賞”受賞作品。

（陸前高田市）

・『大切なわが子へ おっとうとおっかあからのメッセージ 気仙語・特別版1 親を亡くされたお子さん向け』昼寝ネコ・文／蒲生孝子・翻案文（気仙方言版）／大森裕子・画、クロスロード、2011年3月11日

・『大切なわが子へ おっとうとおっかあからのメッセージ 気仙語・特別版2 お子さんを亡くされたご両親向け』昼寝ネコ・文／大森裕子・画、クロスロード、2011年3月11日

※陸前高田と大船渡を含む気仙地域の方言に翻案されている。

・『ふるしきづつみ』小松フスミ・語り手／小松則也・文と絵／Stephen Coler・英訳／新沼史和・監修、ツーワンライフ出版、2013年3月11日、E

※高田病院での出来事。

・『詩と絵で綴る陸前高田～大震災を乗り越えて～』吉田恵美・由美／作、はなそう基金・編、アイブックス、2013年3月11日

・『ハナミズキのみち』浅沼ミキ子・文／黒井健（けん）・絵、金の星社、2013年5月

※原作は『ハナミズキの願い』（2013年10月に出版された冊子、非売品）。地震直後に会った長男、25歳の健（たける）さんは市民会館で職務中に亡くなり、10日後に遺体安置所で再会した。

・『それでも、海へ 陸前高田に生きる』安田菜津紀・写真／文、ポプラ社、2016年2月

・『The extraordinary voyage of Kamome : A Tsunami Boat Comes Home いつまでもともだちでいようね』ローリー デングラーとアミア ミラー・作／エイミー ウエキ・絵、Humboldt State University、2016年3月、E

※高田高校の実習船「かもめ」が震災の2年後にアメリカのカリフォルニア州クレセント市の海岸に漂着し、地元のデルノータ高校の生徒たちの尽力により返還された実話。

・『世界中が歌えば』山崎文子・絵、まっと・文、PEACEの種プロジェクト、2016年10月、E（（高田の一本松））

※陸前高田市の話の中でも、高田の一本松に関するものは特に多く出版されている。

・『高田松原ものがたり—消えた高田松原—』佐々木松男、高田活版、2011年6月

※写真パンフレット

・『奇跡の一本松 大津波をのりこえて』なかだえり・文／絵、汐文社、2011年10月

・『さんぽのき』サトシン・作／真珠まりこ・絵、文溪堂、2011年11月、CD付き

・『きせきの一本松』のはらあい・文／絵、河出書房新書、2013年3月

・『松の子ピノ～音になった命～』北門笙・文／たいらきょうこ・絵、小学館、2013年3月5日、バイオリン

・『まつぼっくりちゃん ありがとうをチカラに』『ありがとう りくぜんたかた』プロジェクト・作／大内裕史・デザイン、ほしぞらデザイン、2013年11月

※2011年10月31日に「まつぼっくりちゃん」が主人公のアニメをYouTubeにアップ。「悲し

いこともあったけど、いつも心にありがとう。ありがとうをチカラに」のメッセージは8カ国語（英仏伊西独露中韓）に訳されて世界中から多くのアクセスがあった。

- ・『希望の木』新井満・文／山本二三・絵、東京法令出版株式会社、2015年5月、DVD付き
- ・『ほくはひとりぼっちじゃない』つかさおさむ・作／絵、理論社、2020年3月
(平泉市)
- ・『浜の命』小松則也・文と絵／Stephen Coler・英訳／新沼史和・監修、ツーワンライフ出版、2013年8月、E
(三陸鉄道))
- ・『うみねこいわてのたつきゅうびん』関根榮一・ぶん／横溝英一・絵、小峰書店、1990年、
※2012年5月に第3刷。
- ・『走れ、さんてつ！～三陸鉄道のある風景よ、もう一度！！～』中井精也・インタビュー／
写真、徳間書店、2012年12月
- ・『はしれ さんてつ、きぼうをのせて』国松俊英・文／間瀬なおかた・絵、WAVE 出版、
2014年

〈地域別（宮城県）〉

(気仙沼市)

- ・『ぶんぶん谷』大谷小学校のおともだち、たけだゆうき・絵／あずまさやか・作、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会、2012年4月
※被災校の子どもたちの絵の表現。イライラしている怒りとカラフルな自然が対照的に描かれている。
- ・『僕はガラス』山下武信・さく／たきまゆみ・え、文芸社、2016年11月
※津波で砕けた窓ガラスを主人公にした作品。避難場所となっていた気仙沼市岩井崎杉之下地区の海拔11mの高台には高さ18mの津波が来て50～60名余が亡くなった。その場所に、2012年3月11日に慰霊碑が建立された。

((けせんぬま震災復興絵本プロジェクト))

- ・『ララとポーの3.11』中田紀子・絵／文、2013年
- ・『おじいさんとカナリア』中田紀子・絵／文、2013年
- ・『ほうほう山の会議』中田紀子・絵／文、2013年
- ・『風が吹く時』中田紀子・絵／村上大・文、2013年
- ・『大水もその愛を消すことが出来ない』三浦淑坤（シュクン）・文（談話）／相澤一夫・絵、
2013年3月
- ・『先生、あのね —あの日からのぼくの夢—』宮沢麻子・絵、あいりん社、2014年
(気仙沼市大島地区))
- ・『みちびき地蔵』福井光・作画、渡邊眞紀・編著、気仙沼大島観光協会、2011年9月17日
※大島葦の脇家に建立

（南三陸町）

- ・『タンポポ あの日をわすれないで』（えほんのもり）光丘真理・作、山本省三・絵、文研出版、2011年10月

※南三陸町志津川小学校の避難所で震災から1週間を過ごした作者が校庭で見つけたタンポポを題材にした絵本。

- ・『つなみのえほんーぼくのふるさとー』くどうまゆみ・文／絵、市井社、2012年5月
- ・『しんちゃんのランドセル』エイキミナコ・絵、東日本大震災復興支援 With You プロジェクト・制作、第一印刷所・発行、2012年5月

※仙台市出身のアナウンサー伊勢みずほが2011年4月に南三陸町伊里前（いさとまえ）保育所を取材して作られた絵本。巻末に、防災情報やグッズ、応急処置についての記述もある。

- ・『くまのリッキーとにじいろのたまご』ジョナサン ウィルソン・原作／みなみ ななみ・文／グラハム フレミング・絵・作／クラッシュジャパン・制作・監修、イーブック出版、2012年12月

- ・『旅するクジラ』すずきわたる・原案／前野博紀・作／三好貴子・絵、木楽舎、2013年3月

※南三陸町の「ホテル観洋」に置かれたオブジェがモチーフ。カラフルで明るい絵本。

（雄勝町浪板）

- ・『帰ってきた小船～ Small Boat Coming Home～』伊藤浩・文／石川かおり・絵／千葉直美・英訳、三陸河北新報社、2017年3月11日、E

※伊藤は三陸河北新報社の記者。「第2勝丸」という雄勝の船が津波によってハワイまで流され、多くの人の協力によって5年後の3月11日に帰還した実話。

（女川町）

- ・『なみだは あふれるままに』内田麟太郎・文／神田瑞希・絵、PHP 研究所、2016年3月

※神田が15歳だった2011年4月に描いた女川町震災復興絵はがき「生きる」の絵は、スペースシャトル搭載のDVDに収められた。「手をつないで瓦礫の前に立っている5人の子供たちの後ろ姿を描きました。この子供たちは、ほんとうは逃げたいんです。がんばりたくないんです。でも、歯を食いしばって立っていることしかできない。そこに、そのときの私の思いがすべて反映されていたと思います。」（「あとがき」に代えて 内田氏と神田氏の対談）

（石巻市）

- ・『大津波伝説 てんでんこ』ひつじあかね・絵と文、講談社ビジネスパートナーズ、2012年2月

※ひつじは石巻市出身、本名（ひさこ）は、父が10歳の時の昭和の大津波で亡くなった父の養母の名（おひさ）から付けられた。

- ・『ヒマちゃんの気持ち』新柵ひろ子・文／水野由貴（思い絵プロジェクト）・絵／田中彩華（思い絵プロジェクト）・編集、思い絵プロジェクト、2013年3月1日

- ・『きぼうのかんづめ』すだやすなり・文／宗誠二郎・絵、株式会社ビーナイス、2012年3月11日

- ・『ひまわりのおか』 ひまわりをうえた八人のお母さんと葉方丹・文／松成真理子・絵、岩崎書店、2012年8月
※全校児童108名のうちの74名と10名の教職員が犠牲になった大川小学校の子どもたちや遺族を描いた絵本。大川小学校の被災については、裁判の内容に触れたもの等、多くの本が出されているが、在日20年の英国人ジャーナリストであるリーチャード・ロイド・パリーらによる『津波の霊たち—3・11死と再生の物語』（早川書房、2018年）は、遺族たちとも出会い、その地域のことなども丁寧に取材したことがまとめられている。
 - ・『町をまもった龍木』 まつだはるか・作／絵、岩崎書店、2013年10月
 - ・『ワタノハスマイル 笑顔になったガレキたち』 犬飼友・ワタノハキッズ／著、青幻社、2013年10月、写真絵本
 - ・『震災の石巻 テイラーさんからの贈り物 津波の犠牲になったアメリカの先生』 千葉直美・文／阿部悦子・絵／市澤マリア・訳、創風社、2013年12月、写真＋イラスト絵本、E
※父の死が描かれている。子どもたちの死を悲しむ絵本は多いが、親の死を正面から描いた絵本は意外と少ない。
 - ・『ど根性ひまわりのき～ぼうちゃん』 漆原智良・作／さくらせかい・絵、第三文明社、2015年7月
 - ・『ぼんぼこぼんすけぼんぼこぴー』 まえだゆうこう・えとぶん、みらいパブリッシング、2018年5月
※ノンフィクション作家である野村路子が、1945年のプラハ・テレジンで強制収容所に送り込まれた多くの子どもがなくなった中で、絵を描くことで夢をもちつづけて奇跡的に助かった子どもたちがいたことを知り、2011年に宮城・石巻の子どもたちと一緒に夢を語りながら描いた絵がJAXA 国際宇宙ステーションに打ち上げられた話。
- ((石巻市牡鹿半島鮎川))
- ・『トミジの海』 齋藤富嗣・話／本多豊國・絵、株式会社バイエフエム、2014年5月
※クラウドファンディングにより完成。
- ((石巻市長面、龍谷院))
- ・『なべになった鐘』 堀込光子・文／堀込亘・堀込光子・絵、2016年7月
※堀込光子は石巻市在住。堀込智之との共著で、『海に沈んだ故郷』（連合出版）もあり、また、堀込智之は、副読本「被災地への誘い」も出している。
- ((東松島市))
- ・『空はきれい 星空はとてもステキ』 かとうひろみ・文／田中伸介・絵、文芸社、2015年5月15日、小1 まーちゃんのマフラー、たっくんのアルバム、みっちゃんの冷蔵庫、（東松島市大曲訪問2011年7月）
 - ・『おのくんとおさんぽ 東松島へん』 中野幸英・作／新城隼・原案、ソーシャルイマジン、2014年12月
※陸前小野駅前仮設住宅で被災者が作って販売したソックスモンキーの「おのくん」を主人

公とする写真絵本。続編に、『おのくんと。はじめまして、おのくん』（2016年12月）、『おのくんと。旅に出た、おのくん』（2017年3月20日）、『おのくんと。みんなでお祭りをしよう』（2017年8月）がある。

- ・『おさとうやま』 ふじえだ・ぶん／みたらし・いらすと、高彩堂、2015年1月
※震災の後に個人で津波避難所を設立した佐藤善文氏の話。英語版やロシア語版、ウクライナ語版も出されている。藤枝雅博は京都大学大学院生。高彩堂は東松島の印刷業者。震災で被害を受けた東松島市立野蒜小学校の校舎を改装した防災体験型宿泊施設「KIBOTCHA（キボッチャ）」で販売されている。クラウドファンディングにより再出版と各国語翻訳が行われた。

（名取市）

- ・『明けない夜はないから』 宮城県の子どもたち＋新井良二・絵／「明けない夜はないから」歌詞（たかはしあきら＋新田新一郎＋渡辺リカ・作詞／作曲）、フェリシモ出版、2013年2月
※被災地の子どもたちが主人公として舞台上がった「こどもスマイルミュージカル」（2011年9月）のテーマ曲の歌詞に子どもたちが絵を描いて絵本にしたもの。名取市の子ども80名の歌声が名取市立那智が丘小学校で収録された。
- ・『マンホールのステージ』 よこお かずよし・作／てるい ひろえ・絵、マンホールのステージ制作実行委員会、2015年8月
※名取市関上が舞台。「READYFOR」を通して47名から資金の支援があった。

（巨理町）

- ・『子どもたちはどこに』 一がれきの中のスイカー』 おかだ じゅんや・文／はたに さとる・絵、KTC 中央出版、2012年3月11日
※てんとう虫のきょうだい主人公。巨理町の荒浜が舞台。スイカの小さな実の話。ちょうど1年後に続編（『みんな いっしょに』一がれきの中のスイカー』おかだ じゅんや・文／はたに さとる・絵、KTC 中央出版、2013年3月11日）が出版された。

〈地域別（福島県）〉

（双葉町）

『失われたバラ園』 はかたたん・文／さわだまり・絵、日本地域社会研究所、2018年5月

（大熊町）

- ・『いつか帰りたい ぼくのふるさと 福島第一原発20キロ圏内から来たねこ』 大塚敦子・写真／文、2012年11月、写真絵本

（葛尾村）

- ・『ラース 福島からきた犬』 ブラザー・トム文／絵、SDP、2012年7月

（富岡町）

- ・『はしるってなに』 和合亮一・文／きむらゆういち・絵、芸術新聞社、2013年6月
※富岡町と青森県浅虫が舞台。和合は、福島市在住で、高校の国語教師。『詩の礫』（2011

年）、『詩ノ黙礼』（2011年）等、震災詩により注目を集める。この絵本は、学生と有志による「福島絵本づくりプロジェクト」によるもの。

（楡葉町）

- ・『ラッキーとの日々～東日本大震災・愛犬と家族の絆をつづった手紙』 渡辺真理子・文／さとうなつき・絵、読み聞かせサークルこだま、2013年9月
※楡葉町からいわき、山形への避難。

（広野町）

- ・『たかのびょういんでんちゃん』 菅野博子・文／絵、高野己保（みお）・原案、岩崎書店、2018年1月
※菅野はいわき市生まれ、小学校教諭を退職後、絵本作家となる。『はなちゃんのはやあるきはやあるき』（2015年）の作者でもある。高野は屋内退避の病院で事務長。井上能行『福島原発22キロ高野病院奮戦記がんばってるね！じむちょー』（東京新聞、2014年）に当時の様子が書かれている。

（いわき市小名浜）

- ・『忘れない…忘れない…山の向こうに原発が見える』 高木徹・作／画、国際ソロプチミスト マリンいわき、2016年～2017年度、E、※英文はいわき総合高校の教師10名によるもの。

（福島市）

- ・『やっぺはあ！希望の光』 石山誠・文／絵、SEEDS 出版、2011年9月11日、E
- ・『ふくしま こども たからもの』 おがわつし、かもがわ出版、2013年10月
※自主避難をするために多くの友だちが転校していった福島市渡利地区の子どもたちとその宝物が、写真と文によって絵本にまとめられている。

（伊達市）

- ・『カッキーとカッキーナのゆめ』 かすや（粕谷）ひろみ・さく／はらだくるみ・え、きむらきょうこ（木村京子）・げんあん／かんしゅう、がんばっぺ！！あんぼ柿協議会、2017年4月
※伊達市立五十沢小学校の子どもたちの活躍が描かれている。子どもたちは平成29年1月5日に首相公邸であんぼ柿のPRを行った。木村は、五十沢小学校校長（平成24年4月～平成27年3月）。平成29年3月31日に、五十沢小学校は創立143年の歴史に幕を下ろした。

〈原発事故〉

- ・『みえないばくだん』 たかはしよしこ・文／かとうはやと・絵、小学館、2011年12月
- ・『さくら～原発被災地にのこされた犬たち～』 馬場国敏・作／江頭路子・絵、金の星社、2011年12月
- ・『ふくしまからきた子』 松本猛・松本春野・作／松本春野・絵、岩崎書店、2012年4月
※広島市が舞台。いわさきちひろの息子松本猛と孫春野による初の共作絵本。
続編⇒『ふくしまからきた子 そつぎょう』 松本猛・松本春野・作／松本春野・絵、岩崎書店、2015年4月

- ・『季節はめぐる 3.11後を生きる里山の〈いのち〉たちへ』辻淑子・作／絵、「戦争と性」編集室、2012年8月
- ・『風太の菜畑』青木ガリレオ&出泉アン・著者／溝上なおこ・イラスト・本文デザイン、青山ライフ出版株式会社、2012年10月
※原発事故の30年後の物語を描いている。
- ・『ほうしゃのうが降ってきたの』くまがいこうぞう・作、ピラールプレス、2013年1月17日
※ホタルが放射性物質で、ホタルの光の強さが放射能という例えを用いて、ホタルのように風によって飛んでくる放射能被害をテーマとしている。
※熊谷孝三は、広島国際大学保健医療学部教授、放射線の専門家。
- ・『けいかいいき ぶたまるさんがいく』マオアキラ・文／さかもとひろかず・写真と絵を合成、創風社、2013年3月11日
※「どうぶつきゅうごたい」が夜こっそり警戒区域に入る。ハンストの場面が描かれたり、決まりとは何か問われていたりしている。
- ・『おじさんとヤマガラ 3月11日のあとで』鈴木まもる・作／絵、小学館、2013年3月11日
- ・『土の話』小泉武夫・文／黒田征太郎・絵、石風社、2013年3月31日
※小泉は福島県小野町生まれ、農学博士。黒田には、他に、『火の話』『水の話』（近藤等則・文）『昭和二十年八さいの日記』（佐木隆三・文）等の絵本作品がある。
- ・『セバスチャンおじさんから子どもたちへ—放射線からいのちを守る—』セバスチャン・プフルークバイル著／エミ・シンチンガー訳／大志多麻衣、トーマス・デアゼー挿絵、岐阜環境医学研究所、2013年4月、写真+イラスト絵本、ドイツ語訳付
※セバスチャンはベルリン在住の物理学者。チェルノブイリ事故の救援活動に携わり、その経験から、福島の子どもたちへのメッセージを絵本にした。
- ・『げんぱくとげんぱつ』増山麗奈・文／絵、子どもの未来社、2013年10月
- ・『びよん吉たちの虹色のお池』ゆ〜あ・作／あきばたまみ・絵、放射能から子・孫を守る親父の会、2013年
- ・『とどけ、みんなの思い—放射能とふるさと』夢ら丘（むらおか）実果・文／渡辺あきお（福島県三春町出身）・絵、新日本出版社、2014年2月
- ・『ほうれんそうは ないています』（ポプラ社の絵本26）鎌田實・文／長谷川義史・絵、ポプラ社、2014年3月
※鎌田は、1991年からベラルーシに99回の医師団を派遣し、約14億円の医薬品を支援してきた（JCF）。2004年〜イラク支援を開始、4つの小児病院へ毎月300万円分の薬を送り、難民キャンプでの診察等を実践している（JIM-NET）。
- ・『希望の牧場』森絵都・作／吉田尚令・絵、岩崎書店、2014年9月
- ・『ひかりのりゅう』小野美由紀・作／ひだかきょうこ・絵、絵本塾出版、2014年12月
※原発事故を象徴的に描いている作品。隠喩的。

- ・『ぼくはラッキー 原発被災犬とふたつの家族』和田智子・作／夏本恵子・絵、東銀座出版社、2014年11月
- ・『かえる ふくしま』矢内靖史・写真／文、ポプラ社、2016年2月
- ・『原発事故で、生きものたちに何がおこったか。』永幡嘉之・写真／文、岩崎書店、2015年2月
- ・『第二楽章 福島への思い』吉永小百合・編／男鹿和雄・画、徳間書店、2015年9月、E
- ・『ふくしまで、オレは農業をやる』藤倉紀美子・文／菅野伝授・画、文芸社、2017年6月
- ・『「牛が消えた村」で種をまくー「までい」な村の仲間とともに』豊田直巳・写真／文、農村漁村文化協会、2018年2月
- ※写真絵本シリーズ 『それでも「ふるさと」』全4巻。以下3巻は同じ著者による同シリーズ。
 - 『「負けてられねえ」と今日も畑に一家族とともに土と生きる』、2018年2月
 - 『「孫たちは帰らない」けれど一失われた「ふるさと」を求めて』、2018年2月
 - 『百年後を生きる子どもたちへー「帰れないふるさと」の記憶』2020年1月
- ※DVD「奪われた村ー避難5年目の飯館村民ー」（2016年）、「遺言ー原発さえなければ」（豊田+野田雅也、2013年）でも豊田による記録を見ることができる。
- ・『ぼくのみまわりおじさん』チャンキー松本・絵と物語、中島敏子・ルポ、サンクチュアリ出版、2018年8月
- ・『長いおるすばん』志賀伸子・文／石黒しろく・絵、文芸社、2019年2月
- ※犬、ブタ、牛、ニワトリが主人公。
- ・『私のふるさと』齋藤イネ・著／朝倉悠三・絵、ポエムピース、2019年9月
- ・『にんげんさまへ』間中ムーチョ・絵／文、SOKEIパブリッシング、2019年11月
- ※茨城県出身。原発事故後の自宅の庭の植物の形が以前とは違う。
- ・『見捨てられた牛ーフクシマより 原発のない世界へ 戸田みどり詩画集』戸田みどり・著、ギャラリーステーション、2019年11月、E
- ・『ポチ 福島原発事故から生還した犬』かつみせつこ・作、文芸社、2019年12月
- ・『わたしはあいちゃんのランドセルー福島原発事故の記録ーふるさとで過ごすモノたちのひとりごと』菊地和子・写真／文、Catherine Arai 訳、遊行社、2020年3月15日

（原発や核、放射能について）

- ・『イラストブック 放射線になんか、まけないぞ！』木村真三・監修／坂内（ばんない）智之+大塚玲子・文／柚木（ゆぎ）ミサト・絵、太郎次郎社エディタス、2011年12月
- ※木村は、原発事故後のチェルノブイリや福島で放射能汚染の調査を行っている。坂内は、福島県内の小学校教諭。
- ・『どうする？どうする？ほうしゃせん』山田ふしぎ文／絵、大月書店、2012年2月
- ※屋外でマスクをすること等が推奨されている。

- ・『放射線ってなあに？』独立行政法人科学技術振興機構（理事長中村道治）サイエンスウィンドウ編集部・発行、平成25（2013）年7月
※副読本形式。縦書き。
- ・『子どもの科学 サイエンスブックス やさしくわかる放射線 実験・観察で放射線を理解しよう！』山村紳一郎・著／床次（とこなみ）眞司・監修、誠文堂新光社、2013年10月
※床次は、弘前大学被ばく医療総合研究所教授。
- ・『未来の神話 原発の神様カクの物語』天野巡（めぐ）・ぶん／え、文芸社、2014年2月
- ・『放射能ってなんだろう？ちいさなせかいのおはなし』小倉志郎・作／田中等・絵、彩流社、2015年9月

〈地域別（千葉県）〉

- ・『噴砂』おぐろよしこ（「千葉手作り絵本の会」）・著、復刊ドットコム、2013年6月、
※千葉での液状化を題材にした絵本。被害に遭いながらも、「東北の方々のことを思えば、わが家の被害はちいさいもの」と考えていた。

〈乗り物を題材にした震災に関する絵本〉

- ・『はしれディーゼルきかんしゃデーデ』すとうあさえ・文／鈴木まもる・絵、童心社、2013年11月
※電気供給の安定しない3月26日に、電気ではなく軽油で走れることから、新潟から郡山へ向かって燃料を届けたディーゼル機関車の話。
- ・『のっぽのスイブル155』こもりまこと、偕成社、2016年1月
※修理されて復興工事に活躍した、コマツ水陸両用ブルドーザー「D155W」の話。
- ・『もりのきでんしゃ ゆうきをもって』ナカオマサトシ・さく／はやしともみ・絵、みらいパブリッシング、2020年2月
※地震と津波、原発事故に遭遇した電車が主人公。

〈自然環境の変化〉

- ・『ギンジとユキの1340日』（えほんのもり）渡辺有一・文／絵、文研出版、2014年3月11日
※サケの一生と震災の姿。
- ・『ダンゴウオの海』（ふしぎびっくり写真えほん）鍵井靖章・写真／文、フレーベル館、2015年1月、岩手県宮古湾
- ・『大津波のあとの生きものたち』永幡嘉之・写真／文、少年写真新聞社、2015年2月

〈被災した子どもを元気づける目的で作られた絵本、または、大人にも寄り添う絵本〉

- ・『ラーメンちゃん』長谷川義史・作、絵本館、2011年9月
- ・『こわかったあの日にバイバイ！ ト라우マと EMDR のことがわかる本』アナ・M・ゴメス

- 著／市井雅哉・監訳／大塚美菜子・訳／角（すみ）慎作・絵、東京書籍、2012年5月
- ・『かなしいさん うれしいさん』まつおかきょうこ・さく／え、東京子ども図書館、2012年9月
※東京子ども図書館による復興支援長期プロジェクト「3.11からの出発」の一環として刊行。
 - ・『てをつなごう』きむらゆういちのゆかいななかまたち・作、今人舎、2012年10月
 - ・『かならず咲くよ』たかのゆり・作／柿崎かずみ・絵、文芸社、2013年1月
 - ・『にこにこ ぼかぼか』きむらゆういちのゆかいななかまたち・作、今人舎、2013年4月
 - ・『ロロとレレのほしのはな』のざかえつこ・作／トム・スコーンオーヘ絵、小学館、2013年5月
※「震災と原発事故後の世界から、私たち・子どもたちの未来を考える」をテーマに、2012年に欧州5か国を巡回した絵本作家たちによるグループ展「手から手へ展」に展示された絵から生まれた絵本。
 - ・『道しるべ』更家なおこ・文／にきまゆ・絵、絵本でつなぐプロジェクト、2014年10月、E
※更家は絵本セラピスト。

〈震災の周辺；震災は描かれていないが、出版によって被災地を応援しようと意図した絵本〉

- ・『東北んめえものうた』長谷川義史・作／絵、佼成出版社、2012年3月
- ・『おじぞうさんはいつでも』山折哲雄・文／永田萌・絵、講談社、2015年2月
※山折が賛同する「被災地に届けたい『お地蔵さん』」プロジェクトで作られた絵本。帯の記述；「東日本大震災で、いつも人々を見守るおじぞうさんもまた多くが被災しました。ふたたびおじぞうさんの姿をそこここにつけることができることを願って」
- ・『もりのおちばりレー』まつきかなこ・作／絵、一般社団法人 道しるべ、2015年11月
※バケツリレーを題材にした絵本。
- ・『あかつきむらのももばたけ』はらきょうこ・作／絵、しまや出版、2016年5月
※福島の桃のブランドである「あかつき」を題材にしたリスの家族の絵本。
- ・『だるまちゃんとかまどんちゃん』かこさとし・さく／え、福音館書店、2018年1月
※宮城や岩手の伝承をモチーフとし、震災の犠牲者に対する鎮魂と慰霊、原発事故への警鐘を暗示する絵本。
- ・『だるまちゃんとはやたちゃん』かこさとし、福音館書店、2018年1月
※福島の伝承や郷土玩具をモチーフにした絵本。以上2冊と、沖縄の伝承を描いた『だるまちゃんときジムナちゃん』の合わせて3冊が同時に出版された。
- ・『鹿踊りのはじまり』宮沢賢治・作／ミロコマチコ・絵、ミキハウス、2018年10月

〈被災地での暮らしからの発信〉

- ・『宮城県気仙沼発！ファイト新聞』ファイト新聞社、河出書房新社、2011年7月
※2011年3月18日から、避難所の小学生の呼びかけにより書かれた新聞の書籍化。「暗い話は

書かない」というルールで新聞が作られた。

- ・『ポーポキ友情物語 東日本大震災で生まれた私たちの平和の旅』ロニー・アレクサンダー文／絵、株式会社エピック（神戸）、2012年1月17日、写真絵本、E
- ・『福島の子どもたちからの手紙～ほうしゃのうっていつなくなるの?』KIDS VOICE 編、朝日新聞出版、2012年2月
※原発事故に対する子どもたちの怒り、窓が開けられず、プールにも入れず、夏でも長袖長ズボンにマスク、帽子を身につけて過ごさなければならなかった。
- ・『ほんのおおきさ特別編 元気です！東北の動物たち』学研教育出版、2012年2月、ふくしま八木山松島盛岡
- ・『ふるさとはフクシマ 子どもたちの3.11』NPO 法人元気になるろう福島・編／葉方丹・制作協力、文研出版、2012年10月
※画文集
- ・『福島の夢、画用紙にのせて～ Visions of Fukushima Children ～』福島県の子どもたち・絵、小学館、2013年10月

〈防災絵本・減災絵本〉

- ・『地震防災えほん じしんのえほん こんなときどうするの?』国崎信江・作／福田岩緒・絵／目黒公郎・監修、ポプラ社、2006年
- ・『リオン』防災士会みやぎ（絵本作製委員会；保田真理・林美千夫・松本康裕・黒田（小田嶋）典子／庄子陽・イラスト）・企画／制作、2013年3月31日
※減災絵本。津波だけではなく、様々な災害に備える。津波の高さを表現したしかけ絵本。
- ・『にげましよう 災害でいのちをなくさないために』河田恵昭・著、共同通信社、2012年4月
- ・『海の子 山の子 地球の子 大切なことってなんだろう』里生海歩子（さとうみほこ）・著／大沼実恵・画、地球（ほし）の子舎（仙台市泉区）、2016年3月11日、減災絵本
- ・『みんなえがおで』宮城県教育委員会、平成28（2016）年3月11日
※みやぎ防災教育副読本「未来へのきずな」の幼児向け。みやぎ防災教育副読本は、各年齢段階ごとに、「未来へのきずな」；小学校1・2年、小学校3・4年、小学校5・6年、「未来への絆」；中学校、高校の各々を対象としたものとワークシートがある。今村文彦監修。

〈学習絵本シリーズ〉

- ・『3.11が教えてくれた防災の本』全4巻、片田敏孝・監修、かもがわ出版、2012年3月31日
- ①地震
 - ②津波
 - ③二次災害
 - ④避難生活

- ・『「安齋育郎先生の原発・放射能教室」全3巻、安齋育郎・文／監修、新日本出版社、2012年
〔第1巻〕放射線と放射能を学ぼう、2012年4月
〔第2巻〕なぜ、なに？原発事故の危険、2012年3月
〔第3巻〕放射能からいのちを守るために、2012年4月

- ・『語りつぎお話絵本3月11日』全8巻、WILL こども知育研究所・編、学研教育出版、2013年2月

①午後2時46分

②にげろ！津波だ！

③家族と会えた

④支え合ったひなん所

⑤子どもたちの「ちから」

⑥助け合う人たち

※この中に収められている『ふたつの勇気』は、独立した絵本としても出版されている。（山本省三・文／夏目尚吾・絵、学研プラス、2013年8月）

⑦広がる支援の輪

⑧『ふるさとをとりもどす！』

- ・『いのちつぐ「みどりびと」』全3集（12巻）のうち、以下の第2集（第5巻～第8巻）が震災に関する絵本。國森康弘・写真／文、農文協（農村漁村文化協会）

第2集（第5巻～第8巻）

- ・第5巻 『歩未とばあやんのシャボン玉—仮設にひびく「じいさん、ねんね」』2014年2月
- ・第6巻 『華蓮ちゃんさいごの家族旅行—「いのちのバトン」をみなの手へ』2014年3月
- ・第7巻 『ぼくはクマムシになりたかった—かあさんに残したさいごの笑顔』2014年1月
- ・第8巻 『まちに飛び出したドクターたち—南相馬の「いのち」をつなぐ』2014年2月

- ・『3.11復興の取り組みから学ぶ未来を生き抜くチカラ』全3巻、赤坂憲雄・監修、日本図書センター、2015年2月

①困難を乗り越える・人とつながる

②地域を愛する・自然と共に生きる

③防災を知る・日本の未来を考える

- ・『被災地の人のSOS』河東田博・著、ゆまに書房、2015年5月

※「知っておきたい 障がいのある人のSOS」シリーズ全5巻+別巻1巻のうちの別巻。ちなみに、第1巻～第5巻は、①聞こえにくい人のSOS ②学びにくい人のSOS ③見えにくい人のSOS ④体を動かすにくい人のSOS ⑤理解されにくい人のSOS。

まとめにかえて

1933（昭和8）年の三陸大津波の後、宮城県内だけでも63カ所に朝日新聞社の寄付金によって津波の碑が建てられたということであるが、その多くは、およそ80年後の東日本大震災の頃にはすでに見向きもされず、文字が読みづらくなっていたり、碑のすぐ後ろにコンクリートのゴミ捨て場が建てられて説明が読めなくなったりして、それが何の碑なのかも顧みられなくなっていた。2011年の津波の被災地から数多くそのような碑が見つかっている。それは、大災害の記憶を70年も80年も継承していくということの難しさを物語っている。

一方、原爆投下から75年が過ぎた長崎の小学校には、当時の出来事を世代から世代へと語り継いでいる実践がある。長崎市立山里小学校では、『長崎の鐘』等の著者である永井隆の尽力により、被爆した子どもたちの作文集『原子雲の下に生きて』が1949年8月に出版された。永井はその原稿料を執筆者に配った後、残りのお金で学校の敷地内に「あの子らの碑」を建て、同年11月3日には除幕式が行われた。永井によれば、その碑には、誰が建てたとか、何のために作られたのかという説明書きはいらない、ただ、炎の中で手を合わせる女の子のレリーフと、「平わを」の3文字のみを刻み、長い年月がたって何のための碑か分からなくなっても、子どもたちが碑に登ったりして遊んだりするうちに、「平わを」とはどういうことなのか、この碑はなぜここにあるのか、そのことを考えてほしい、との思いでずんぐりした形にデザインしたという。

今なお毎年11月3日前後に山里小学校では、「あの子らの碑」を前にして「平和記念式」が開催されている。その式典では、永井隆が作詞し、木野普見雄が作曲した「あの子」の歌が、子どもたちのブラスバンドの伴奏によって大切に歌い継がれている。なお、毎年8月9日の長崎市平和祈念式典では、爆心地の反対側にある城山小学校の子どもたちが歌う「子らのみ魂よ（このみたまよ）」（この曲も作曲は木野普見雄）と、この山里小学校の「あの子」の歌が、毎年交互にそれぞれの学校の6年生児童たちによって披露されている。今年の長崎市平和祈念式典の「長崎平和宣言」の中では、この両方の歌を作曲した木野普見雄の手記の内容が言及された。

今年の11月2日に行われた山里小学校の「平和記念式」には、永井隆の孫にあたる永井徳三郎と、木野普見雄のご子息に当たる木野隆博が来賓として出席していた。当日の山崎直人校長の話では、碑が建てられた時の永井隆の考えは、半分が外れて、半分はその通りになった、ということが子どもたちに語られた。半分が外れた、というのは、「あの子らの碑」が建てられてから長い年月がたった今でも、山里小学校の子どもたちはみんな、何のための碑なのかちゃんと分かっているということを示している。一方、半分はその通りになった、というのは、この碑がここにあり続けることによって、子どもたちはたくさんの犠牲者のことを想い、平和とはどういうものなのか、それを考え続けているということを示している、ということだった。

上述の城山小学校でも、1951年8月8日に、正門を入れてすぐのところに「少年平和像」が建てられたのを機に、翌日に第1回平和祈念式が行われて以来、毎月9日に平和祈念式が続けられていて、今年の11月には第832回目を数えている。先述の「子らのみ魂よ」は、この第1回

目から大切に歌い継がれているとても美しいハーモニーの曲である。

今考えると、原爆投下後の間もない時期にその恐ろしく悲しい経験に向き合い、作文を綴り、式典などを通じて直面し続けてきたことは、子どもたちや、その地域の大人たちにとっても、心理的な負担の大きなことだったと思う。しかし、山里小学校では1300人、城山小学校では1400人の子どもたちが原爆の犠牲になったといわれるその場所で、75年もの年月が経った今も、その経験が語り継がれ、作詞者作曲者の孫や子が臨席する中で子どもたちが「あの子」を歌い継いでいて、その姿からは、追悼の想いや使命感が伝わってくる。

戦後のベビーブームを迎え児童数や学校数が増えた時期とは異なり、2011年の震災は少子化や過疎化のただ中であって、震災で大きな被害を受けた学校も統廃合が進んでいる。その中で、この震災の経験や教訓を次の世代に受け継いでいくことは容易なことではないが、この10年間で出版されたたくさんの絵本を通して学んでいくことはできる。

本稿では、リストアップした絵本についての詳細な分析は紙幅の都合によりかなわなかったが、今後の分析を通して、震災に関して何をどのように伝えたり学んだりしていくべきなのかを考えていきたい。